

乳幼児のことばの発達と紙芝居

—紙芝居『ごろん』と『ふうちゃんのそり』をめぐって—

中 川 理恵子

Usefulness of KAMISHIBAI for development of infants language ability.
—Study of two KAMISHIBAI works “GORON” and “FUCHAN NO SORI”—

Rieko Nakagawa

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

乳幼児のことばの発達と紙芝居

—紙芝居『ごろん』と『ふうちゃんのそり』をめぐって—

Usefulness of KAMISHIBAI for development of infants
language ability.—Study of two KAMISHIBAI works
“GORON” and “FUCHAN NO SORI” —

中川 理恵子
Rieko Nakagawa

は じ め に

一人でお座りすることの出来ない0歳児も、紙芝居を楽しむことが出来る、と伝えると多くの人が驚く。「0歳児にとって、集団で見る紙芝居は難しいのではないか」「8場面の紙芝居は長いのではないか」「離れた所に設置された画面に興味を持たせ続けられないだろう」等と危惧するのである。

筆者は、複数の0歳児が集まった場所で紙芝居を演じ、乳児が紙芝居を楽しむことを体験している。紙芝居舞台の扉が開くと、母親に抱かれた0歳児の観客は、紙芝居の画を見たり演じ手を見たり、時折はうれしそうに足など動かして、ついに最後まで関心を他にそらすことはなかった。紙芝居は、乳幼児に、他の児童文化財では得られない、言葉と物語に関する刺激を与えられるといえるのではないか。0歳児の観客の反応を直に感じながらそのように考えた。

本稿では、前言語期にある乳児が、紙芝居を楽しむ事が出来るという事実を手がかりに、紙芝居の特性を確認し、乳幼児のことばの習得とどのような関係があるのか、どのように利用すべきであるのかを考察する。その上で、絵本と紙芝居を、文章と脚本の比較を中心に検討することを通じて、言語の習得になぜ紙芝居が有用であるのかということを考察する。

1 乳児の言葉の獲得と紙芝居

(1) 紙芝居『ごろん』の実演から

紙芝居の制作、販売を手がける童心社は、ホームページ上で、一歳児が保育園で紙芝居を楽しんでいる様子を動画で伝えている(注1)。しかし、さらに年少のまだ言葉の意味ひとつひとつを理解せず、意味のある言葉を話すことの出来ない0歳児も紙芝居を楽しむのである。

筆者がその紙芝居の力を体験したのは、中平順子氏(注2)主催のチャイルドサロンでのことだ。

そこでは、毎月1回、中平氏とボランティアスタッフが中心となり、わらべうたあそびや、紙芝居の実演が行われている。参加費無料、申し込み不要なので、いつも同じ親子が集まって時間をか

けて信頼関係を築いていく場ではないが、家庭的な雰囲気の間である。

その日 (2016年12月13日)、チャイルドサロンに集まったのは、12組の親子生後4ヶ月から2歳まで。0歳児が、最も多く、まだ一人で座れない赤ちゃんも2組ほどいた。筆者が演じたのは、〈2・3歳児のふれあいあそび ことばとからだであそぼう!〉と記されている紙芝居『ごろん』(脚本・絵／ひろかわさえこ 監修／三石知佐子 童心社 2004)であった。あらすじは以下の通りである。

ねずみさんが草原で気持ちよさそうにごろんと仰向けに寝ていると、うさぎさん、たぬきさん、へびさん、くまさんが次々に来てごろんとし、みんなで、あっちやこっちにごろんごろんする。

8場面の紙芝居で、画面を抜く度、動物が増えた絵が現われる。

この作品を演じ終わると、その部屋にいた母親やボランティアスタッフが、口々に「あかちゃんたち見ていましたね」と驚いたように感想を述べ合った。0歳児が紙芝居を楽しむ様子は、その場に集まった者たちにとっても新鮮だったようだ。それは、絵本を読み聞かせしたときと異なる反応であったからではないだろうか。

(2) 絵本の読み聞かせ

徳永満理は『赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな 乳児保育の中の絵本の役割』において、0歳児への絵本の読み聞かせの様子を記述している(注3)。

生後4か月頃は、絵本を抱っこして読んでも、絵本のほうにほとんど視線がいかなかったが、5か月に入ったくらいから絵本に視線が向いてくるようになったという。興味深いのは、この頃に『にんじん』という絵本を読み聞かせしたときの様子である。

「読んでいる間、視線は読み手に向いています。(中略)時々、視線は絵本に向かうけれどやっぱり読み手の顔に戻ってきます。」(引用1)さらに「7か月ごろになると、絵本の中の絵に視線がいくようになるのですが、ただ絵本を開いて見せているだけでそうなるわけではありません。読んでいるところをそっと指で押さえ、赤ちゃんの顔を見て視線を合わせ、赤ちゃんの視線を指で押さえいているところに誘うのです。赤ちゃんは指で押さえたところを見て、また読み手の顔を見ます。そこで笑顔で応えて認めてあげる。そんな繰り返しをしていくうちに、絵本とのかかわり方を知り楽しみ始めるようになり、(中略)1歳ごろには、絵本の中のことばを開いて絵を見ることを楽しむようになってきます。」(引用2)

この引用文からは、絵本の絵を見ながらお話を楽しむという行為は、乳児が自然に行うことではなく、大人が絵本の楽しみ方を手ほどきする必要があることがわかる。なぜなら、乳児が、絵本を読み聞かせする人に興味を持ったためだ。

小椋たみ子は『乳幼児期のことばの発達とその遅れ』において「誕生直後から、赤ちゃんはスピーチ音(話す声)と他の音を敏感に聞き分け、さらに、母親の声や胎児期に聞いていた母国語の音

声を好んで聞くことがわかってます。」(引用3)とし、「乳児は誕生時から、人間の顔、音声、スピーチへの関心を示し、生後数分でいろいろな顔のしぐさや音を模倣します。」(引用4)と述べている。

また、7か月の赤ちゃんと視線を合わせて絵本の絵に誘導する場面は、目と目を合わせることでコミュニケーションをとる赤ちゃんが示されている。

乳児は、人や声に興味があり、さらに「生まれた時からコミュニケーション能力を持ち、全身全霊で周囲に働きかけている」(引用5)存在だといえる。この特徴を、踏まえると、冒頭で述べた、まだお座りの出来ない4、5か月の乳児への紙芝居実演の成功の理由がみえてくる。

(3) 紙芝居の特性

乳幼児が紙芝居を享受出来る理由の一つとして、紙芝居の演じ手が、紙芝居舞台の脇に立つことが挙げられる。観客である乳児が興味を持つ声と顔(演じ手)と、絵が同じ方向である為、絵を見ながら話を聞くという絵本では難しいことが、紙芝居では乳児にも自然できたといえる。絵本では、文を読んでいる最中の読み手と聞き手の目が合うことはないが、紙芝居は、観客と目を合わせながら演じることが出来る。

筆者が紙芝居『ごろん』を演じる際にまず心がけたことは、間である。言葉と言葉の間、抜きのタイミングを演じ手だけで行うのではなく、観客(幼児、乳児だけでなく、母親やボランティアの方々(大人)を含むその部屋のすべての人)の気持ちに意識を向け、呼吸を合わせて進めていくよう心がけた。間をとりながら、非言語のコミュニケーションをとっていたといえる。演じている最中に、乳幼児は非言語コミュニケーションの名手であることに気づかされた(注4)。間によって一場面、一場面進むごとに、集中が高まっていくのが感じられた。

紙芝居は、演じ手と観客が向き合うというスタイルであるため、演じ手と観客が、非言語のコミュニケーションをとることが可能なのである。

筆者が演じた時、乳児たちは母親の膝の上で安心した状態で、演じ手である筆者の表情を見、時折私と目を合わせながら、言葉の響きと絵を合わせて楽しんでいた。赤ちゃんを抱く母親が紙芝居に興味を持ち楽しんでいることも大きく影響しただろう。また、同じ部屋にいた、歩くことができ、言葉を用いる事が出来る年上の幼児たちが、じっと紙芝居に見入っている様子や雰囲気も、乳児が紙芝居の絵に興味をもつことに影響していたようだった(注5)。同じ時と場所を共有する集団で見る紙芝居ならではの効果ではないだろうか。

(4) 乳児の物語享受

『ごろん』は、繰り返しが多用されたわかりやすい展開であるが、そこには物語性がある。一匹のねずみがひなたぼっこしていると、繰り返しの言葉を使いながら一場面ごとに新しい仲間がやってくる。しかし、4場面になると、突然へびが登場し、それまで繰り返されていたリズムが変わる。

脚本は次のようになっている。

1 場面「ねずみさんが ごろん (ぬきながら) うさぎさんも」

2 場面「ごろん (ぬきながら) たぬきさんも きて」

3 場面「ごろん (ぬきながら) あらあらへびさん」

4 場面「によろん? いえいえへびさんも ごろん」(引用6)

というように、へびという異質な生物の登場に合わせ、言葉にも変化を与え、意外性を表出している。また小さな一匹のねずみから始まり最後はクマという大きな動物まで次第に大きさが大きくなりながら(へびを除く)仲間が増えていく展開は、画面を抜く度に動物が増えていく絵がおもしろさを強調し、観客をわくわくさせる。紙芝居の絵は、詳細な描写などはせず、そぎ落とされたポイントのみを表現する傾向があるため、この変化が視覚的に伝わりやすい。最後の8場面の絵は、太陽の下、のんびりごろんとする五匹が俯瞰で描かれている。一匹から始まった物語の大団円を印象づける。(文末の図『ごろん』を参照)

観客に対して紙芝居の画面と演技手が同じ方向にいるからこそ、乳児も言葉の音を楽しむだけでなく、耳で聞きながら目でお話の進みを実感し、絵によって強調された物語も感じる事が出来たのではないか。

以上のように、紙芝居のスタイルと作品の特徴が相まって、4、5か月の乳児も『ごろん』を楽しめたのだといえよう。

乳児が言葉を獲得するためには、前言語期のかかわりが大切であるという。

「保育所保育指針」の保育内容の言葉に関わる項目、すなわち「第3章保育の内容／1 保育のねらい及び内容／教育に関わるねらい及び内容／エ 言葉」に示されている、ねらい③には「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。」とある。しかし、先に述べたように、絵本を楽しめるようになるにはある程度の時間と成長が必要である。

紙芝居は、観客と一緒に物語を楽しもうとする観客仲間(母親や少し年長の子ども)の影響のもと、演技手と目と目を合わすことで生まれる非言語コミュニケーションによって心を通わせながら、絵の力と言葉の相乗効果によって、物語に親しむことが出来る仕組みを内包している。紙芝居は、前言語期の乳児に、言葉の発達に有用な状況を創出する事が出来るといえよう。

他日、紙芝居『こんにちは』(脚本／内田麟太郎・絵／山本祐司 童心社 2009)を同じ場所で異なる親子の前で、演じたときも0歳児の観客は、紙芝居を楽しんでいたことも報告しておく。

2. 物語紙芝居と乳幼児の言葉の獲得

(1) 絵本と紙芝居—紙芝居『ふうちゃんのそり』について

紙芝居を楽しむのは、前言語期の乳児だけではない。言葉を獲得し始めた子どもたちにとっても、魅力的な児童文化財だ。前章で確認した、紙芝居が内包するしくみは、成長段階によりまだ一人では興味を持ってない作品にも興味を抱くことを促す等の特徴があり、幼児期の子どもにとっても、言葉の発達、物語享受に役立つと考えられる。本章では、紙芝居の脚本に注目して、さらに幼児の言葉の発達と紙芝居の関係を考察したい。

紙芝居『ふうちゃんのそり』（脚本／神沢利子・画／梅田俊作 童心社 1985）は、童心社ベストセクション第一集（全10巻）に所収された人気のある作品だ。あらすじは以下の通りである。

ふうちゃんは、まだ小さいことを理由に、おにいちゃんのそりに乗せてもらえない。そこで、おじいちゃんにお願いし、自分用のそりを作ってもらう。出来あがったそりを持って雪の山へ行ったらふうちゃんは、ふもとを目指して滑り始める。すると、そりは、どんどんスピードを上げ、兎よりも早く滑り、切り株にあたって舞い上がり、谷底に落ちてしまう。谷底で、ひとりぼっちになったふうちゃんが、変な声のほうへ歩いて行くと、そこには冬眠中のクマの親子がいた。ふうちゃんは一晩、クマさんたちの所で暖かく過ごし、よく朝、ふうちゃんを探しにきたおじいちゃんに出会う。

この作品は、1981年発行『そりにのって』（文／神沢利子・画／平山英三 くまのえほん2 童心社 1981）を紙芝居化したものだ(注6)。また、絵本『そりにのって』は、1961年に、月刊絵本こどものとも12『そりにのって』（さく／神沢利子・え／丸木俊子 福音館書店「母の友」絵本69）を改編したものとなっている。

本稿ではこの三作を比較し、紙芝居だからこそ育むことが出来る言葉の発達について考察する。

（2）絵本と紙芝居—文章と脚本：臨場感

こどものとも版『そりにのって』、くまのえほん版『そりにのって』、紙芝居『ふうちゃんのそり』は、ストーリーに大きな違いはない。異なるのは使用される言葉や表現である。

初めに、作品の冒頭部の本文を引用しながら比較する。（本文引用時の斜線は、改行を示す）

a) こどものとも版『そりにのって』と、くまのえほん版『そりにのって』（2作品は同じ文章）

ふみちゃんは、やまの こどもです。／ふゆやまは ゆきで きらきら、／やまは、そりすべりの こどもたちで いっぱい。／「にいちゃん、あたしも のせて。」ふみちゃんが たのんでいます。（引用7）（下線は筆者）

絵本の冒頭の下線部は、そのページの絵に描かれている少女の説明だ。これから始まるのは、山の子どもふみちゃんの物語であることが、強調されている。また、ページの絵を眺めながら山の子どもの生活を想像していく時間をもたらす一文ともいえる。

b) 紙芝居『ふうちゃんのそり』

①／きらきら ひかる ゆきの やまは、／どこもかも そりすべりの こどもたちで／いっ

ばいです。／（ふうちゃん）「おにいちゃん。／わたしも そりに のせてよ」／ふうちゃん
が たのみました。（引用8）（下線は筆者）

主人公の名前が、「ふみちゃん」から「ふうちゃん」に変更されている。声に出して呼びやすく、聞き取りやすい名前になった音にこだわった変更であろうか。

紙芝居の冒頭の下線部は、物語の始まる場所を臨場感ある表現で示している。主人公は紹介されるのではなく、明るく元気な年少の少女の台詞で表現され、それはふうちゃんだと添えられる。観客は、山の子どものような特別な条件のないふうちゃんに、自分を重ね合わせて作品世界に入り込めるようになっている。

この場面では、絵本、紙芝居の双方に同じ内容の会話文がある。絵本の「にいちゃん、あたしも のせて。」は、ふみちゃんが、乗せてと頼んでいることが伝わるだけであるが、紙芝居の「おにいちゃん。／わたしも そりに のせてよ」は、ふうちゃんの性格や様子、この時の気持ちが想像しやすい、生活に密着した生きた台詞になっているといえる。

（3）絵本と紙芝居—文章と脚本：外言と内言

次に、ふみちゃん（ふうちゃん）の願いが叶わず、そりが行ってしまう場面を比較する。

a) こどものとも版『そりにのって』と、くまのえほん版『そりにのって』（2作品は同じ文章）

なのに、びゅう—／にいちゃんの そりは いってしまいます。（改ページ）

うちへ かえった ふみちゃんが／おじいさんに たのんでいます。／「おじいちゃん。

（／：くまのえほんのみ）あたしにも、そり つくって。」（引用9）（下線は筆者）

絵本では、兄ちゃんのそりがいってしまってから、ふみちゃんがおじいさんにそり作りを頼むまで、心理描写などの説明がなく、ページのめくりがあるだけだ。さらに下線部の文には目的語がない。めくりの時間と、このページの木工製作をするおじいさんやふみちゃんの絵を手がかりに、想像を巡らすような作りになっているようだ。

b) 紙芝居『ふうちゃんのそり』

なおにいちゃんは、／—さっとぬきながら—／びゅう—

②／って、いってしまいました。／（ちよつとの間）／（ふうちゃん）「おにいちゃんの いじわるっ。／あたし すべれるのに……／あたし なかないのに……／（ちよつとの間）／あつ、そう
だ。／いいこと かんがえた。／おじいちゃんに たのもうっと……。」／—ゆっくりぬく—

③／（ふうちゃん）「おじいちゃん。」／うちへかえって、ふうちゃんは／たのみました。／（ふうちゃん）「ねえ、あたしにも そり つくって」（引用10）（下線は筆者）

紙芝居では、絵本にはないふうちゃんの心の中が言葉となって表されている。観客に伝わる時は、演技手の声で伝えられるが、下線部は内言であろう。なぜならこの場面の画は、遠くに滑っ

ていく兄を見送るふうちゃんの後ろ姿がメインだからだ。(文末の図『ふうちゃんのそり』2を参照)

子どもはまず外に向かう言葉、外言を習得し、次に徐々に思考の手段である内言を得ることとなる(注7)。まだ、内言を持たない幼児であっても、ふうちゃんの内言を体験できると言えるのではないか。絵本が、内言をうながす時間を作り出しているのに対し、紙芝居は、内言を具体的に示しているといえる。

(4) 絵本と紙芝居—文章と脚本：読者と観客

続いて、ふうちゃんがおじいさんに造ってもらったそりで、雪山を滑りおりる場面を比較したい。この場面は、こどものとも版に描写の記述が多いという、くまのえほん版との違いがあるが、本稿ではくまのえほん版を中心に比較する。

a) くまのえほん版『そりにのって』

ふみちゃんの そり、すべる すべる。(改ページ) うさぎと かけっこ。(改ページ) しかと かけっこ。(改ページ) きの きりかぶを じゃんぷして、／はやしの とんねる くぐって、／ふみちゃんの そり、はやい はやい。／(こどものとも版はここに1ページ分そり滑りの描写が入る) どこまで いくのかな、ふみちゃんの そり (改ページ) あーっ。ぴゅーんと そらに まいあがった。(改ページ) たにそこの ゆきが、むくむく うごいて、／ふみちゃんが あたまを だしました。／「わあ、こんな ところに おっこちて／しまったわ。」／くらい しずかな たにそこは、／だれもない ひとりぼっち……。／おや、へんな こえが します。ぐううう—ごおおお— (引用11) (下線は筆者)

絵本版は、ふみちゃんのそりが滑っていく様子を、カメラで写しているように描写している。視点はあくまで、この物語を外から眺める、絵本の絵を眺める読者の位置だといえる。下線部は、読者とふみちゃんの立場の違いをはっきりとさせる一文だ。

b) 紙芝居『ふうちゃんのそり』

⑤／すべるすべる、／ふうちゃんのそり。／やまを くだり、はやしを くぐり、／ぴゅう
.....ぴゅう.....／—さっとぬく—

⑥／うさぎが ぴよん ぴよん はしって、／ふうちゃんの そりと おいかけて。／(うさぎ)「ふうちゃんに まけるもんか。／そら ゆけ、おいつくぞ」／でも、ふうちゃんの そり、うさぎよりはやい はやい。／(ふうちゃん)「おーい、うさぎちゃん、ついといで一、」／ぴゅう〜ぴゅう〜／すべる、すべる。ふうちゃんのそり。／3分の1までぬきながら—／(ふうちゃん)「あっ! きりかぶ。」／—のこりをさっとぬきながら—／そのとたん、ジャンプして、

⑦／びゅ——ん／ふうちゃんの そり、そりに／まいあがった。／—さっとぬきながら—／
(ふうちゃん)「わっ!」(おどろいて)

⑧／たにそこへ そりごと／おちてしまいました。／そとはまっくら。／ふうちゃんは ああ、
ひとりぼっち。／(間)／(くま)「ぐううう……………ごおおお……………」(引用12)(下線は筆
者)

紙芝居は、ふうちゃんの能動的な様子が会話文を用いて描かれる。ふうちゃんと一緒に観客も滑り降りる感覚だ。それを、顕著にしているのが、下線部の擬音語だ。音からもスピードや様子がイメージでき、臨場感が沸く。

この場面は、物語の山場、ファンタジーへの入り口としても重要な役割を持っている。

絵本では、何がきっかけでそりが空に舞い上がってしまったのかわからない。絵には雪山の表面が遠く下に描かれているので、とても高く舞い上がったように見える。(文末の図『そりにのって』p 20～21参照)しかし、ページをめくるとすぐに、雪の中から顔を出したふみちゃんの様子が描写される。「わあ、こんな ところに おっこちて／しまったわ。」という台詞は、独り言とも内言ともとれるが、自身を冷静に見つめ、困惑したり、怯えたりする様子は強く伝わらない。絵には、暗い背景が描かれているが、雪から顔を出したふみちゃんの様子は、驚異の表情も控えめで現実の続きに見える。(文末の図『そりにのって』p 22～23参照)

紙芝居では、そりで滑るふうちゃんと競争するうさぎさんが、話しかけてきて会話をする場面がある。とても早く滑るそりはそのスピードに乗って、ファンタジーの入り口へ向かっていくようだ。3分の1だけ画面を抜き、切り株を見せ、ふうちゃんが叫んだと思うと、残りの画面がさっと抜かれ、空中に舞い上がったふうちゃんのそりが示される。「びゅ——ん。」そりが空を舞って降りていく時間と様子がこの言葉によって示される。ファンタジーの世界への旅立ちといってもよいだろう。そして、ふうちゃんの「わっ!」という声で、ふうちゃんも観客も、ファンタジーの世界へ到着する。

この場面の画はとても印象的だ。(文末の図「ふうちゃんのそり」8を参照)雪降る薄暗がりの背景、その真ん中のうっすらスポットライトがあたったような光の中にふうちゃんが一人正面を向いて立っている。その表情は呆然とでも言おうか。ふうちゃんの台詞はなく、「そとはまっくら。／ふうちゃんは ああ、ひとりぼっち。／(間)」とある。この(間)は、演技手と観客とふうちゃんが、この思いがけない出来事を共有する時間だ。絵本と比べると、ふうちゃんの体験が観客の体験に変換されやすくなっているといえる。

続く、くまの寝息の音も、絵本では、「変な声がします」と説明してから擬音語がはいるが、紙芝居では、擬音語が、くまの台詞となってまず伝えられ、その音にふうちゃんが気づき「あれっ、変な声」と言う。観客の視点とふうちゃんの視点は重なるように出来ている。

この後、ふみちゃん（ふうちゃん）は、冬眠中のくまといっしょに寝るのだが、絵本の方のくまは、寝息でコミュニケーションをとるのみだが、紙芝居の中のくまは、眠そうに言葉を話す。紙芝居は、ふうちゃんが到達したファンタジーの世界を表現し、絵本よりドラマティックな作りになっている。

作者の神沢利子は、「熊という動物に対しては一種特別な気持ちがあります。熊って「神話的な人間」って感じがするんです。（中略）座敷にあったヒグマの金色の毛皮の手触りがよみがえって懐かしくなるとか、さまざまな思いが重なって、熊は私にとって身近な存在でありながら神秘的な存在です。（後略）」（引用13）と述べている。

ふうちゃんが体験する「ふかふか けがわの かあさんぐまに だかれて ねました。」という危機脱出方法は、作者の根底にある熊への畏敬が作り出したファンタジーなのである。紙芝居は、観客が、このファンタジー世界を体験するように楽しむことが出来る脚本となっている。

これまで見てきたように、同じストーリーであっても、絵本と紙芝居では、使用される言葉や表現、伝え方が異なっていた。そしてこれらの違いは、絵本の読者と物語の主人公や登場人物の関係、紙芝居の観客と物語の主人公や登場人物の关系到影響しており、それぞれ特異な関係を創出している。紙芝居のほうが、享受者が自身を重ねやすく、物語の中に入りやすいと言えるだろう。

このため、紙芝居にでてくる言葉は生きた言葉となり、乳幼児の言葉の発達を促すことに大きく影響すると考えられるのである。

お わ り に

人間は生まれながらにコミュニケーションをとる社会性のある存在だ。あかちゃんが言葉を獲得していくのは、コミュニケーションを望むからにはほかならない。乳幼児が言葉を獲得するためには、前言語期の間に様々なコミュニケーションをかわす事が大切である。紙芝居を見ているとき、観客は、演じ手と非言語のコミュニケーションを交わしながら、自身の世界以外の刺激に触れることが出来る。さらに、臨場感をともなった生の言葉の外言と内言に触れることができる。物語を介すことで観客である乳幼児は、大人の介入なしに自由にそれらの言葉を感じる事が出来るのである。

紙芝居が創出するこれらの状態は、乳幼児にとって言葉の発達に有用だと指摘したい。しかし、この状態を作り出すためには、紙芝居の演じ方も大きな役割をもつ。演じ方についてのさらなる研究が必要であろう。さらに子ども自身が、生きた言葉で出来ている紙芝居を演じることにより、言葉の発達を促すことにつながる可能性についても研究すべきである。

今回取り上げた、紙芝居『ふうちゃんのそり』と絵本『そりにのって』の比較については、本稿で分析を尽くしたとは考えていない。紙芝居の脚本と絵本の文章の特性と受容者との関係は興味深いものがある。新たな機会にさらなる研究を深めたい。

紙芝居 『ごろん』



1



2



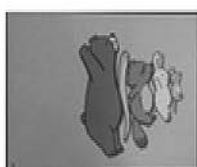
3



4



5



6



7



8

紙芝居 『ふうちゃんのソリ』



1



2



3



4



5



6



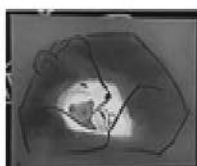
7



8



9



10



11



12

絵本 『そりにのって』



表紙



P2-3



P20-21



P22-23

注釈

- (1) 童心社ホームページ <https://www.doshinsha.co.jp/product/kamishibai.php> 参照2017.10.14
- (2) さいたま子ども文化研究所主宰。1993年に、全国各地で紙芝居の実演と創作の勉強をしている人の研究と交流の場として、紙芝居サミットを立ち上げ、2017年までに22回を開催、講師も務める。「すてきなともだち」(童心社 2018) など紙芝居・その他の著作も手がける。
- (3) 徳永満理 赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな 乳児保育の中の絵本の役割 かもがわ出版 2009 第一章0歳児の発達と絵本の選書と読み聞かせ (3) 読み聞かせの実際
- (4) 乳児は6ヶ月ごろから、ますます環境に関心を持ち、ときには見慣れたパートナーだけでなく環境中のほかの事物へ関心を移していく。小椋たみ子／小山正／水野久美 乳幼児期のことばの発達とその遅れ ミネルヴァ書房 2015 3 赤ちゃんはことばがでる前に養育者とどんなやりとりをしているか?—コミュニケーション能力の発達 (3) 規則性や驚きを楽しむ コミュニケーション—6ヶ月ごろ p25
- (5) 2. 3ヶ月の乳児はコミュニケーションのやりとりの中で足、発声、凝視、表情など、全身で行動する。この情動的な原会話は、相互的であり乳児は活発にこの原会話に参加している。小椋たみ子／小山正／水野久美 乳幼児期のことばの発達とその遅れ ミネルヴァ書房 2015 p24
- (6) 2002年6月25日7刷発行の「ふうちゃんのそり」には「この作品は1981年発行「そりにのって」(童心社刊)を紙芝居化したものです。」と明記されている。
- (7) 谷田貝公昭・監修 中野由美子・神戸洋子編 新・保育内容シリーズ 言葉 一藝社 2010 p10

引用文献

- (1) 徳永満理 赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな 乳児保育の中の絵本の役割 かもがわ出版 2009 p41
- (2) 引用(1)に同じ p49
- (3) 小椋たみ子／小山正／水野久美 乳幼児期のことばの発達とその遅れ ミネルヴァ書房 2015 p19
- (4) 引用(3)に同じ p24
- (5) 谷田貝公昭・監 中野由美子／神戸洋子編 新・保育内容シリーズ 言葉 一藝社 2010 p10
- (6) 脚本・絵 ひろかわさえこ 監修・三石知佐子 ごろん 童心社 2004
- (7) さく・神沢利子 え・丸木俊子 そりにのって 月刊絵本こどものとも12 「母の友」絵本

69 福音館書店 1961 p1

文・神沢利子 画・平山英三 そりにのって くまのえほん2 童心社 1981 p1

(8) 脚本・神沢利子 画・梅田俊作 ふうちゃんのそり 童心社 1985 1場面

(9) 引用 (7) に同じ p1、p2

(10) 引用 (8) に同じ 1場面、2場面、3場面

(11) 引用 (7) に同じ p4、p5、p6、p7、p8

(12) 引用 (8) に同じ 5場面、6場面、7場面、8場面

(13) 子どもと読書 特集：神沢利子の作品世界 5／6月号 (381号) 親子読書地域文庫全
国連絡会 2010 p15

参考文献

ユリイカ 総特集：絵本の世界 第34巻第3号 (通号456号) 青土社 2002

曾和信一 保育と言葉 保育者と子どもの心の架け橋を求めて 明石書店 2003

岡本夏木 幼児期—子どもは世界をどうつかむか— 岩波書店 2005

日本児童文学 特集：絵本テキスト考 3・4月号 小峰書店 2017

子どもの文化 特集：紙芝居の今、これから 第49巻1号通巻549号 子どもの文化研究所 2017

絵本 BOOKEND 2017 通巻14号 絵本学会 2017